

旧霞ヶ浦海軍航空隊本部の遺跡めぐり 1

予科練平和記念館



1921年(大正10年)、阿見には霞ヶ浦飛行場が開かれ、翌年には霞ヶ浦海軍航空隊が開隊されました。

1939年(昭和14年)に、飛行予科練習部「予科練」が、横須賀から移転して以来、終戦まで全国の予科練教育・訓練の中心的な役割を担うことになりました。

予科練平和記念館は、こうした予科練の歴史や阿見町の戦史を保存・展示するとともに次世代に伝承し、命の尊さや平和の大切さを考へて頂くために、平成22年2月2日に開館しました。予科練の制服である「七つボタン」にちなみ、7つのテーマ展示を中心に紹介しています。

旧海軍道路桜並木



霞ヶ浦航空隊の水上班から航空隊本部まで通じる幅8間の道路(通称「海軍道路」)があり、茨城県内で最初の舗装道路でした。

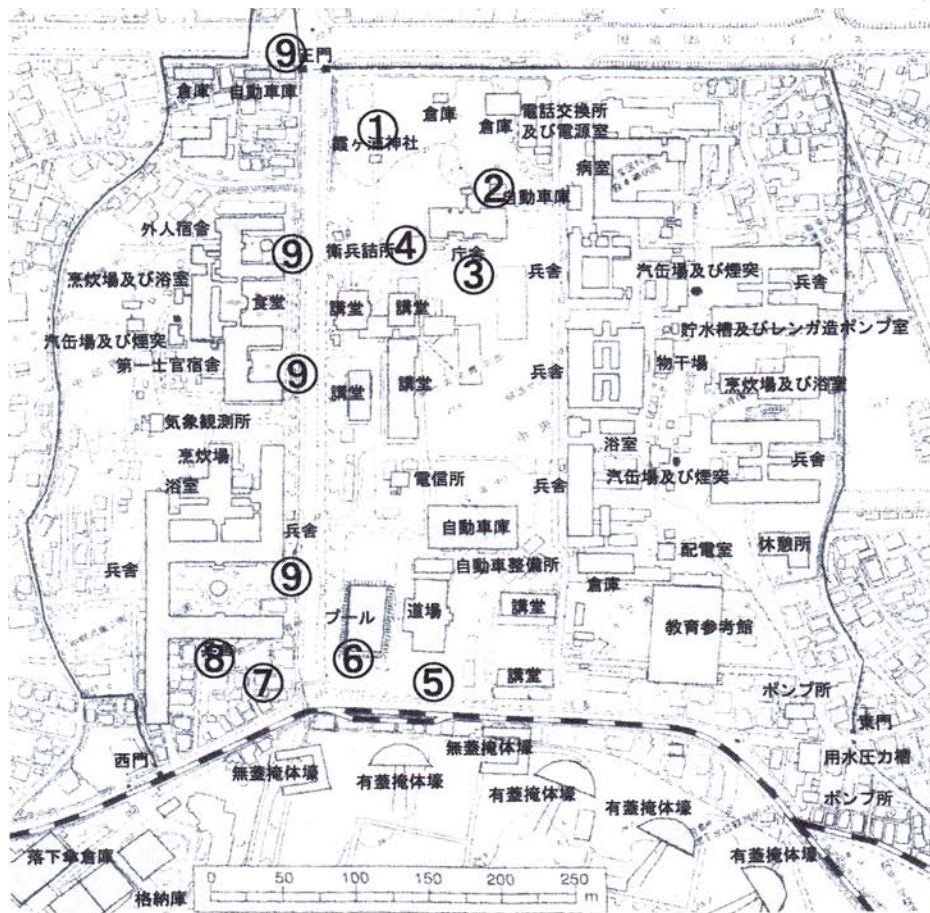
昭和天皇は、1942年(昭和17年)までに計4回、霞ヶ浦海軍航空隊への行幸のため通られ、また秩父宮、高松宮、その他多数の皇族が通られました。

道路脇には桜が10m間隔で植わっておりました。

昭和4年(1929年)8月19日にドイツの飛行船ツェッペリン伯号がベルリンから飛来。



旧霞ヶ浦海軍航空隊本部(昭和19年末頃)



茨城大農学部内

- ①霞ヶ浦神社跡
- ②第一士官宿舎階段親柱
- ③軍艦旗掲揚塔
- ④方位盤
- ⑤皇太子お手植えの松
- ⑥プール跡
- ⑦海軍航空殉職者慰霊塔
- ⑧貯水池跡
- ⑨各門柱跡



阿見観光ガイド

旧霞ヶ浦海軍航空隊本部の遺跡めぐり 2

① 霞ヶ浦神社跡



当時の神明造の霞ヶ浦神社(拝殿は造営されなかった) 戦後、中郷の阿彌神社境内に移設されました

大正14年10月、霞ヶ浦海軍航空隊で山本五十六が建設委員長になり、飛行機事故による殉職者の英霊を祀る神社の建立計画が出されました。大正15年2月1日、霞ヶ浦神社が航空隊北側樹林辺りに建立され、全国の海軍航空隊関係者60有余の英霊が祀られました。神殿は伊勢神宮と同じ「古式神明造」で神社の建立資金は全国の海軍関係者の浄財でまかなわれ、敷地整備、基礎工事、参道整備は霞ヶ浦海軍航空隊員の奉仕で行われました。

終戦後、進駐軍の指令により霞ヶ浦神社は撤去となり、阿見町の格段の配慮により中郷の阿彌神社に移設されました。

② 第一士官宿舎階段親柱(阿見町指定文化財)



旧霞ヶ浦海軍航空隊第一士官宿舎

この親柱は、霞ヶ浦海軍航空隊第一士官宿舎正面玄関の2階に通じる階段に設置された4本の内の2本です。柱頭には西洋風の彫刻が施され、気品溢れるものがあります。昭和4年11月19日、この宿舎は昭和天皇行幸に合わせて建築され、行在所になりました。陛下は茨城県下で行われた陸軍大演習の際、水戸の行在所(旧茨城県庁)から列車で土浦に到着されました。建物は2階建の鉄骨造りで鉄筋を組み込んだレンガを用い、内外装は漆喰仕上げでした。各階の廊下はコンクリート仕上げ、各室の床は板敷で部屋数は1階は41、2階は53ありました。戦後この宿舎は茨城大学に引き継がれ、教場等に使用されましたが、1994年(平成6年)から翌年にかけて解体されました。

③ 軍艦旗掲揚塔(阿見町指定文化財)



天皇陛下行幸の際には天皇旗を掲げました。

1922年(大正11年)11月から1945年(昭和20年)8月まで霞ヶ浦海軍航空隊で使用していた軍艦旗掲揚塔です。当時ここは航空隊本部庁舎前に位置し、毎日海軍軍艦旗が掲載されていました。堅固なコンクリート製で基部・支持金具が残っておりポールは撤去されています。国家の象徴として旗は敬虔なものであり、軍旗に対する敬礼については陸海軍とも特に厳しく指導しました。旗の掲揚及び降下中は隊員は旗に向かい敬礼するか、旗が見えない時はラッパの音に向かい不動の姿勢を取っていました。

通常、午前8時の「課業始め」のラッパで掲げられ、午後5時「課業終了」のラッパで格納されました。

阿見観光ガイド

旧霞ヶ浦海軍航空隊本部の遺跡めぐり 3

④ 方位盤(阿見町指定文化財)



このコンクリートの方位盤は霞ヶ浦海軍航空隊を中心として円盤の縁を360度に刻み、そこに代表的な地名が刻まれています。これは、練習生達が自分の位置、方位、風向等の把握を日頃から習慣づけるためのものです。

海軍機は通常海上飛行となるため、自分の飛行機の位置を常に把握しなければならず、空中衝突等の事故防止のため方位・方角を厳しく指導されました。

一説では、学生達が出身地の方角をここで確認して故郷を偲ぶ場所であったとされています。

⑤ 皇太子殿下御手植えの松



この松は大正11年に皇太子時代の昭和天皇が霞ヶ浦海軍航空隊に来訪されたことを記念して植樹された松です。碑の裏側には「大正十一年六月十八日霞ヶ浦臨時海軍航空術講習部」と刻まれていて、これは霞ヶ浦海軍航空隊が発足する前の名称です。海軍は将来の戦闘で勝敗を制するのは航空機ではないかと言うことを第一次世界大戦の教訓から察し、着々と航空機の戦術的運用を研究していました。この講習部と言うのは、霞ヶ浦飛行場を使って海軍士官、準士官、下士官に航空機の操縦教育を実施するもので、その教官には当時日英同盟のよしみもあり、イギリスからセンピル大佐を団長とする30名を招聘しました。その教育内容は、飛行機の操縦、整備、射撃、爆撃、写真、落下傘降下など多方面に渡り、航空術教育の基礎を確立しました。

⑥ プール跡



⑧ 貯水池跡



⑦ 海軍航空殉職者慰霊塔



この慰霊塔には、我が国海軍が航空技術の訓練を始めた大正5年(1916年)以降、昭和20年(1945年)終戦までの全日本海軍航空隊で訓練等で殉職された方々の御霊5573柱が祀られています。日本海軍の発展の礎となられたこの御霊を慰霊するため、大正14年霞ヶ浦航空隊に霞ヶ浦神社が建立され、春秋の祭が行われていましたが、終戦当時やむなく神社の撤去となり、社殿は阿彌神社に移設されました。

昭和30年、慰霊顕彰事業が進められ永久的な慰霊塔を建立し、その基底に霊名録を収納安置するのが最良であることが決められ、有志の寄付金をもって慰霊塔を建立し、ここに御霊は永久に鎮まることとなりました。

旧霞ヶ浦海軍航空隊本部の遺跡めぐり 4

⑨ 門柱跡



霞ヶ浦海軍航空隊正門の門柱は昭和33年3月に阿見小の正門に移設されました。

○ 落下傘倉庫



○ 有蓋掩体壕(阿見町指定文化財)

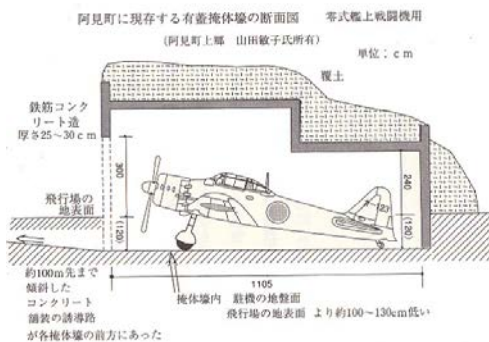


この有蓋掩体壕は太平洋戦争中、敵の空襲から飛行機を守るために、霞ヶ浦海軍航空隊飛行場周辺に造られた21基の有蓋掩体壕の内、唯一現存する壕です。

建設時期は1943年(昭和18年)末から1945年(昭和20年)初頭にかけて、鉄筋コンクリートの上に土を盛った構造となっています。

機体は後部から壕の中に引き入れられました。雨水を排水するため壕の基礎部分は少し傾斜しています。

戦後、海軍から払下げとなり、居宅になっていたために幸運にも現存されています。他の壕は鉄不足の影響で鉄筋取りにあい、壊されてしまいました。



形状寸法

前面幅約	22m
開口部約	14m
奥行き約	11m

○ 海軍用地標柱



海軍道路沿いに海軍用地標柱が2箇所あり、当時の面影が見受けられます。標柱の下部は舗装されていて読むことは困難です。